



タイトル Title	「伝統」を逆照射する：ウガンダ東部パドラにおける聖霊派キリスト教会の指導者たち
著者 Author(s)	梅屋, 潔
掲載誌・巻号・ページ Citation	近代,115:1*-43*
刊行日 Issue date	2016-12
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLDOI	10.24546/81009659
URL	<a href="http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81009659">http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81009659</a>

# 「伝統」を逆照射する

ウガンダ東部パドラにおける聖霊派キリスト教会の指導者たち

梅 屋 潔

(調査協力 ポール・オウォラとマイケル・オロカ=オボ)

## I はじめに

私は、1997年3月から現在まで継続しているウガンダ東部パドラ (Padhola)<sup>(1)</sup> におけるフィールドワークにもとづいて、そこに主に居住するアドラ (Jopadhola) の「宇宙論」(cosmology) (ないし、最近の流行では「存在論」(ontology)) の手掛かりとして「災因論」を分析するための資料を示してきた [梅屋 2008, 2009]。また、密接にかかわる問題系として葬送儀礼についても着目し、分析を進めてきた [梅屋 2014a, 2015]。調査地の詳細については梅屋 [2016b] などを参照されたい。

本稿で示そうとするのは、ウガンダ東部パドラにおける新興のキリストの一教派、「アゴラ聖霊教会」の中心人物2名と、レジオ・マリア (Legio Maria、ラテン語で Legion of Mary) 教会の中心人物1名のインタビュー記録である。マライカ・ジェニファー (Malaika Janifer: マライカはスワヒリ語で天使) へのインタビューは、2008年8月14日、アゴラ村で行われた。大主教オドンゴ・ジョン・マーティン・アドラ (Odongo John Martin Adhola) へのインタビューは、2008年8月24日にアゴラ聖霊教会 (Agola Holy Sprits Church) で、マリア・アディキニ (Maria Adikini) に対するインタビューは、トロロ県ナゴンゲラ準郡のカタジュラ村、レジオ・マリア教会で、2008年8月19日に行われた。

レジオ・マリア教会は1962年から1963年にかけて西ケニアでカトリックから独立した。サブサハラ最大のAIC (African Instituted/Initiated Church) の一つで、現在の信者は400万人近いと言われる。SIC (Spiritual Initiated

Church) ともいわれ、シメオ・オンデト Simeo Ondeto (c1910/20-1991) をキリストの生まれ変わりの「黒いメシア」とし、「黒いマリア」「黒いキリスト」を唱える。マリアを「女王」「母」とみなす信仰を中心とするが、実際にマリアやキリストの「ビジョン」を見ることのできる霊媒を通して霊界と直接交渉し、憑依や悪魔祓い、癒やしなど実際的な効果を信仰する<sup>(2)</sup>。ここでは詳しく扱わなかったが、教会には無数の蠟燭が灯されていた。蠟燭の「数が多いほどよい」といい、重要な儀礼の意味がもたされていた。

インタビューのテーマは、主に新興勢力である教会の成り立ち、私の調査のテーマである「災因」となる諸観念に対する対処法などである。

これまでに収集された手元の資料のなかでも<sup>(3)</sup>、長い時間対話に答えてくれたなかで、これほど豊富な情報量が含まれ、それが「テキスト」<sup>(4)</sup>という形になったとき読みうる形で提示できるものはさほど多くない。これらはそのなかでは、非常に特別なものである。しかもいずれもバランスよく「災因」についての叙述を含んでくれている。

本稿の目的は、話者である新興のキリスト教関係者がどのようにアドラの観念を考えているのかを検討することはもちろんであるが、もうひとつのねらいとして、アドラの「伝統的」諸観念が、新しい宗教との対話という文脈のなかで、どのような用いられ方をするのかを示すことにある。また、本稿ではそれを示しながら、それぞれの観念がどのような文脈で語られるのかを確認していくことになるだろう。

## II 聖霊派教会の指導者たちとの対話

### 1 「マライカ」ジェニファーの話

#### (1) 治療の方法

「Q：あなたの宗教では、ダノ・オイ dhano oyir 「呪われた人」、シココ sikoko<sup>(5)</sup>、あるいは毒（キダダ kidada）の被害を祈りと聖書の朗読によってなおせると聞きました。それは、どういうものなののでしょうか？あなた自身が精霊に憑依されるのですか？ (①)

A：この人が何かそういうものに悩まされているのですか？

Q：どういうふうにするか知りたいんだろうと思います。彼の国にも似たようなことはあるでしょうから。

A：「聖書」（バイブリ baibul）をつかって祈っていると、「聖霊の力」（メン men）が満たされてきて、私自身が神（レンド・チュニイ rendo chunye）にかしずいたり、私の心が「聖霊」（チュニイ・マレン chunye maleng）にあげわたされたりするのです (②)。「ビジョン」（メニロック menyirok）が見えて「天使」（マライカ malaika）の案内で依頼人の抱えている問題がすべてわかります (③)。そしてその人のために祈ります。教会では「天使」は、信者ひとりひとりにあらわれます。それぞれの人生にふさわしい「福音」（ワッチ・マベール wach maber）をあたえてくださるのです (④)。「天使」と「聖霊の力」による「ビジョン」で、その人がどんなに遠いところから来た人であろうと、その人にこれから起こること、今起こりつつあることがわかるのです (⑤)。

問題が何であれ、私は聖書をつかって祈りを捧げます。「聖霊」、そしてその「力」を招いて「天使」のつかわす「ビジョン」を通してみとおすのです。何が起きているのか、これまで何が起こったのか、これから何が起ころうとしたのか、何でもわかります (⑥)。」

## (2) 「聖霊」によって「治す」

「Q：あなたの宗教は、カトリックからわかれたものなのですか？それとも別のも

のですか？

A：この宗教はケニアから来ました。カトリック教会からわかれたものではありません (⑦)。Born-again キリスト教徒があつまってできたものです。「聖霊教会」(カニサ・チュニイ・マレン kanisa pa chuny maleng) といいます。私はカトリック信者でしたが、改宗しました (⑧)。

Q：一緒に祈っている皆さんも「聖霊」を受け取るのですか？

A：いいえ。「聖霊」があらわれるのは「聖なる心」をもつ者(ジョノ・マ・チュニイ・ジョ・オロニイ jono ma chuny jo olony) に対してだけです (⑨)。

Q：どんな病気でもなおる(ボス both 癒えること)のですか？

A：祈っていると(クワヨ kwayo:n 祈り)、「聖霊の力」によって触発され、「天使」によって導かれた「ビジョン」によって、どんな病気でも本当になおるのです (⑩)。私にとって手に負えない病気のときは「天使」がちゃんと教えてくださいます (⑪)。そのときには、患者さんに短いお祈りを捧げるのです。

「天使」がそう教えてくださったときには、そんな患者さんにどんなお祈りがいいのか、指示をしてくださいます。そうするとなおるのです (⑫)。

Q：シココ sikoko、キダダ kidada、ジュウォキ jwok による病や厄災もなおし、解決するのですね？

A：ええ。屋敷に招かれてなおすこともあります (⑬)。屋敷のなかから呪いにつかわれた「草」(ヤーシ yath) を引き抜く(フド・イエン fudho yen) のです (⑭)。私が聖書を読むと、「聖霊」が私を強くしてくださり、どうやったら屋敷のなかの「草」を引き抜くことができるか、道を示してく下さいます (⑮)。

Q：誰かに害をもたらしてきた「シココ」などもなおすのですか？

A：それは、私達の大切な仕事です。「シココ」もちの人々もなおします (⑯)。どんなことであろうとも、すべては神の御名のもとにおこなわれるのです。私は聖書をつかい、「聖霊の力」をつかいます。そういう意味では、聖書は私の薬なのです(ニヨソニ・バイブリ・アヤーシ・パラン nyutho ni baibul ayath paran) (⑰)。

### (3) お礼、信者、幸運

「Q：なおったあとに、祈りで「シココ」を送り返したお礼を請求しますか？

A：いらっしゃった患者さんからはひとり 1,000 シリングずついただいています。なおったらお礼をもっていらっしゃいます (18)。たいていは教会にいらっしゃいます。

いただいた 1,000 シリングで私は石鹸や塩など生活に必要なわずかばかりのものをかうのです (19)。

Q：遠くから来た人でもなおせるのですか？

A：患者さんはあちこちからいらっしゃいます (20)。私達の教会は、トロロでもっとも大きな教会のひとつですからね。その本拠地がここ、アゴラ村なのです。

Q：夜でも祈りを捧げるのですか？

A：日曜日、水曜日、そして毎日昼食後に祈りを捧げます (21)。

Q：あなたのように病気をなおせる人は教会に何人いるのですか？

A：だいたい 6 人ぐらいです (22)。それぞれ違う地域に住んでいますが、日曜日にはアゴラのこの教会で顔を合わせます。ひとりはずラランダ、もうひとりはおシア、キレワに住んでいる人もひとりいるし、バジュウエンダにも一人います。私達の牧師さまを忘れてはいけませんね (23)。

Q：「天使」があらわれ、「聖霊の力」を得て、患者をなおしても、お礼をもって来なかったら場合、その人に「呪詛」をかけたりしませんか？

A：「聖霊」は、そういう人の詮索はしないように教えてください。私達は神によって定められた役割を果たしたのですから。でも、いらっしゃればもっとよいことは確かです (24)。

Q：時折太鼓 (ブリ buli) を叩く音がしますが、あれは治療が始まったとか、誰

かがなあったということですか？

A: 私達はウエレ were (神) に祈り、聖書を読みます。ときに太鼓を叩くだけです。ときに太鼓を叩かないで神をたたえることもありますし (25)、患者さんはいつでもなおるし、それを実感したりするものです。

Q: 幸運を導くこともできますか？

A: それはその人がどういう人生を歩んできたかによりますね！信仰があれば、幸福はおのずとついてくるでしょう (26)。

Q: 「聖霊の力」はどのようにあなたに降臨するのですか？

A: 患者さんの人生についての「ビジョン」が見えるまで「天使」が「力」といっしょに「聖霊」を送ってくるのです。「天使」のコミュニケーションは心のなかの「聖霊」をとおしてであり、それ以外のやり方はありません (27)。

Q: 誰かを呪うための「草」を引き抜くとき、どのようにして祈るのですか？

A: 聖書を読んでいると、「天使」がどこにあらうとそれが埋められた場所を知る「ビジョン」を送ってくださいます (28)。「聖霊の力」は、心のなかで、「シココ」、「毒」など不吉なものを回収する力になってくださいます (29)。

#### (4) 「ビジョン」から得た「聖霊」の力

「…私達の教会は、アリス・ラクウェナの聖霊運動とは関係がありません。ラクウェナは、「草」を使いました。それで、ヤモ yamo の世界に魂を売り渡したのです (30)。

Q: 「ターク」を取り除くことができますか？それから、あなたのお祈りは、伝統的な「ジャターク jatak」と同じなのですか？

A: 長くここに住んでいるのならおわかりのはずです。いろいろなところから「ターク」をなおしてもらうために祈りを受けに来るでしょう？伝統的なタークを取り除く儀礼も、他の方は、「草」を使います (31)。私達は「聖書」と「お祈り」だけです。「聖書」は、どんな病にも効く、私達の万能薬なのです (32)。

Q:「シココ」がなおらなかったとって文句を言いに来た患者はいませんか？

A:なればお礼参りにくる、とさきほどいったとおりです (33)。

Q:なおったとって来る患者から大金をもらうことはありますか？

A:持ってくる人はいるし、状況によりますが、私達は受け取らないことになっています (34)。もし、受け取ったら「聖霊の力」が、私達から飛び去ってしまい、もう患者さんをなおす力もなくなってしまうでしょう (35)。

Q:どこで「聖霊の力」を手に入れたのですか？

A:神に祈っていたら、「聖霊の力」がもたらされたのです (36)。

Q:患者を呪っていた「草」を取り除くのも「聖霊の力」なのですか？

A:「ビジョン」を見ると、どこに「草」が植えられているかわかります。「聖霊の力」が私の手を通じて呪いに使われたすべての「草」を引き抜くのです (37)。

ときには盥をつかうこともあります。盥に水を少し入れ、患者さんはそれで足を洗います。それから白い布で覆い、お祈りと歌をはじめます。すこしすると呪いのために屋敷に植えられた「草」が、「聖霊の力」によって盥のなかに引き寄せられてきます (38)。

他の人が害をなすためにつかったすべての薬や「草」は、「聖霊の力」による「ビジョン」のなかでわかります。それが神が私達に多くのことを教えてくださるやり方なのです (39)。

下着をなくしたり、盗まれたりしてそれが呪いにつかわれたとしても、盥のなかからでてきます (40)。

Q:もしここから別なところへ連れて行かれても、「聖霊の力」は保たれるのですか？

A:ルワンダに連れて行かれたとしても、「聖霊の力」をもち続けることができるでしょう (41)。神はどこにでもいるのだし、私は何人かの「天使」にまもっていただいていますから。

私が「力」をなくすとすれば、それは患者さんにお金を請求してはならない、



という神の命令に背いたときでしょう (42)。「聖霊の力」は、何の代価もなく私達にもたらされたのですから (43)。だから患者さんをご自分のほうでお考えになって感謝の念を示す何かをもっていらっしゃるのです。

Q：オドンゴ牧師、私達が患者をなおすところをみられそうな集まりはいつ開かれるのですか？

A：患者さんはいつでも来ますし、いつでもお祈りを捧げてなおしています。ただ日曜日と水曜日は、お祈りの日と決まっていますから。でもあなたがたのために患者さんを集めてなおしたりはしませんよ。私達の治療が知りたければ、白人の患者さんでもいいから、連れてくるようにお伝え下さい。」

### 【解説】

冒頭の質問は、私の関心を受けて助手で本稿の共著者でもあるマイケル・オロカ＝オボ (Michael Oloka-Obbo) がしたものである。プロテスタントの彼にとってもこれらの観念を「治療できる」と公言できるというアゴラ聖霊教会の主張は衝撃であったことが伺われる (1)。基本的には、キリスト教はこうした土着の概念は、「子供」として無視するキッチング以来の態度をとるのが常だったからである [Kitching 1912]。これまでの調査でも、キリスト教の関係者が「呪詛」を行ったり、解呪に立ちあつたりという主に噂レベルでの資料は散見されたが、いずれも表だつてのことではなかった。また、梅屋 [2008, 2009] で紹介してきたとおり、一般にバドラでは憑依について言及される場合、「死霊」や「悪霊」に憑依される事例が一般的で、それ自体が病気の症状と考えられるほどネガティブなものであるが多かったのである。

答えは、この聖霊派の3人に共通して一般的なものだが「聖書」を用いる、と言うことである。ただし、このときに「聖霊の力」(メン)に心が「あけわたされる」という考え方がきわめて特徴的である (2)。すると、依頼人の問題が「すべてわかり」(3)、天使が信者それぞれに対して福音を与えるという

(④)。

のちに扱うレジオ・マリアもそうだが、直接聖霊とのコンタクトができる霊媒の存在がこのタイプの教会の第一の特徴である。

聖書を読んでいると、「天使」が「精霊の力」を招いて「ビジョン」をもたらし、問題への洞察、予言などの根拠となっているのである (⑥)。また、祈りによって、どんな病でも治癒することができるという (⑩)。その理解能力は、依頼者の属性や出身に限定されないことが示唆されている (⑤)。

アゴラ教会はケニアからきたものだが、後のレジオ・マリアとは異なり「ボン・アゲイン派」のキリスト教徒が連合してできたとされている。ウガンダでは基本的にもとがカトリックでも、ペンテコスタ系の再生運動を伴うものは「ボン・アゲイン」と俗に総称されるが、ここではカトリックとの関係は明快に否定されている (⑦)。自らはカトリックだったが改宗したという (⑧)。

「聖霊」を受け、「ビジョン」を見るのは信者のなかでも特定の者だけであり、「聖なる心をもつ者」と認識される (⑨)。どんな病気も治癒に至るとされ (⑩)、もしその能力を超える病気のとときには、「天使」の指示に従えば (⑪)、治るすべが示されるという (⑫)。

ここからが特徴だが、シココ、キダダ、ジュウォキなどによる病や厄災への治療も認め、ときには屋敷に赴いても治療するという (⑬)。これは行為としてはジャシエシとかわらない、というのがもうひとりの助手のポール (Paul Owora) の感想である (私の感想でもある)。しかもその治療法が、「草を引き抜く」という (⑭)。聖書を読むことによって教えられる、というのが、ジャシエシ<sup>(5)</sup>ががらがらの占いなどを通じてその憑依霊に「草の引き方」を教えてもらうのとあまりシステムはかわらない (⑮)。

また、「シココ」治療も「大事な仕事」という (⑯)。基本的には、ウガンダ教会やローマン・カトリックなどのオーソドックスなキリスト教がこうした迷信には触れたがらないのとは対照的である。「メン (聖霊の力)」が入ってきて、

「ビジョン」をもたらすのは「天使」および「聖霊」だから、主体的に自分でできるのは「聖書を読むこと」と「祈ること」だけである。これらをシンボリックに「聖書は私の薬」とマライカ・ジェニファーはいう (17)。

ジャシエシとの差別化はどこではかるのか。ひとつはラブキである。ここでは後払いで治ったらもってくるのが特徴である。ジャシエシのラブキは、別のところで紹介したように [梅屋 2008, 2009]、「手付け金」「謝礼」どちらの訳も当てはまるが、儀礼を行う前にある程度支払っておくのが慣例となっている。これまでの資料では、ラブキの相場は、3,000 シリングと雌鳥が最低ラインだった。しかしここでは、後払いで 1,000 シリング (18)。その使い道は、石けんや生活必需品だという (19)。「遠くから来る患者もなおせるのか」というマイケルの質問は、もはやジャシエシ扱いしているともいえる。一般に近場のジャシエシは、噂などで依頼人の私生活にも通じていることが多く、何か言い当てることがあるとしても不思議ではない。遠くのジャシエシで身の周りの細々したことを言い当てるのが能力の高いジャシエシである、という通説があるので、ここでマイケルは、ジャシエシにその能力の真贋を尋ねるような質問をしているわけである。答えは、あちらこちらから来る、とのこと (20)。トロロで最も大きな教会だというのが、もちろんウガンダ教会とローマ・カトリックを除いてのことであろう。

祈りを捧げるのは、日曜日、水曜日、そして毎日の昼食後 (21)。「ビジョン」を見る能力を有しているのは牧師 (後出のオドンゴ) 含めて 6 人ほどおり (22、23)、日曜日にはアゴラで顔を合わせるがそれぞれ離れた村に居住する。

マイケルは「患者を治してもお礼をもってこないことはないか？」と問い、さらに「[呪詛]をかけることは？」と追い打ちをかけるが、自分の役目は神に定められていてそれを実行しただけなのでお礼の有無は関係ないが、もってきた方がなおいとの模範解答 (24)。

あくまでも信仰実践の根本は「聖書」と「祈り」であるという。太鼓は、信

仰のためのツールではないと否定した(25)。聖書を読んで祈っていると「天使」が「聖霊」と「力」を送ってくる。その結果としての「ビジョン」によるコミュニケーションを唯一無二のものとし、それ以外の方法については厳しく否定する(27)。「シココ」や「毒」問題を解決する場合にも、呪いのために埋められた「草」を引き抜く場所を知るのにも同じ方法をとる(28、29、37)。鹽に草が引き寄せられたり呪いに用いた下着などの身近なもちものが出てきたりすることもあるという(38、40)。

また、幸運を招くポジティブな「呪詛」の実践(最近それをうたい文句にするジャシエシやウィッチドクターが都市に多い<sup>(7)</sup>)については、本人の行い次第だと積極的な関与を否定した(26)。

アドラにもアリス・ラクウェナ<sup>(8)</sup>率いるHSM(Holy Spirit Movement)は進軍してきて多くの若者を戦いに駆り立て、数多くの犠牲者を出した。HSMがパドラに進出して内戦が激化したのは、1987年頃と推測される。ムランダ地域は特に積極的に関与したようで犠牲者も多く、戦死者が出現するなどの怪談も多い。戦中やむなく殺人を犯した者の前には夜になると、殺された者が姿をあらわすという。そのため、夜道の一人歩きや、明かりを消して眠ることができない、などの症状が報告されている。逆に言うと、明かりをつけたまま眠る人間には、この疑いがかけられうる、ということである。

一般に「聖霊」の名前はそれとむすびつけて考えられる傾向にあるが、アゴラ聖霊教会はそれとは関係ないという。ラクウェナは、「草」を用いたので、いわば邪道であり、悪魔に魂を売り渡した、というのである(30)。たった今まで、「草の抜き方」の話をしていたのだが、自分は特定の目的のために「植えたり、埋めたりしない」ということだろう。続くジャタークを除く方法でも、ジャシエシは「草」を用いるが(31)、自分たちがもちいるのは「万能薬」である「聖書」と「祈り」だけであることを強調している(32)。

治ったら自発的にお礼をもってくるというが(33)、大金をお礼に持ってこ

られても、「神の命令」として受け取らないことになっている (34、42)。仮に受け取ったら「聖霊の力」が失われるだろうという (35、42)。この力は、ただ神に祈っていたら自然にもたらされた力であり (36)、何かの代償で手に入れたのではない (43)。ゆえに、代価を受け取ってもならないと言う論理である。

その力は、その決まりさえまっていれば、場所を変えても有効だという。「ルワンダに連れて行かれても」(44)「聖霊の力」は維持できるのだという。

これらは、われわれが調査のプロセスで出会ったティボ以外の「呪詛」や、多くの力が、地理的な距離を克服できず、近距離でのみ効果を発揮することを想定した質問だったが、質問したマイケルは (ウガンダ教会の信者)、むしろ、地理的条件を問わないこの力に、ティボの力に通じる不気味なものを感じた、と後に私に語った。

## 2 オドンゴ・ジョン・マーティン・アドラ主教の話

### (1) 「不幸」

「Q:…「不幸」(リフオリ *lifuoli*) というものをどのように解釈したらいいのでしょうか？この聖霊教会ではどのような解決策がありますか？

A：私達は、神はすべての問題を解決することができる、と信じています。悪いことをした人にだけ、「不幸」は訪れるのです (1)。

子供が親に連れられて教会に来ます。その教えを受けるためです。その子は親に何の悪いこともしていない (2)。その短い人生のなかで「不幸」を経験していないのは当然でしょう (3)。

子供は、すべての親も、オジもオバも、それ以外の人もしあわせにします (4)。怒らせたりもしません。「不幸」が訪れるはずがあるのでしょうか？ (5)

親が子供に対して「大人になればわかるよ」(ドンギ・イノネニ *dongi inoneni*。

教育の現場の常套句)と論じたとします。これが、子供が最初に「不幸」な結末に終わるかも知れない、と知るきっかけになるのです(⑥)。こういういいかたは、あたかも子供が将来「不幸」になることを請け負っているようにも聞こえますね(⑦)。

霊的なかたちで成長してゆく分には、子供は何の「不幸」にも直面しないことになっています(⑧)。そういった子は、すべての親を敬っていますし、また愛されてもいるからです。

Q:たとえば聖霊の素養のない屋敷で育ち、問題を抱えて一例えば発狂して一この教会を訪れたとします。その場合どうなさいますか?

A:神は私どもの祈りを聞き入れてくださいます。そういう人も人生を取り戻すのです。その者の力になって、その「不幸」を追い払ってくださるように祈るのです(⑨)。それから、私達は何がしてもいいことで、何がしてはいけないことか、導きとなるような霊的な教えをはじめます(⑩)。これこれこういうことをすると「不幸」が降りかかってきますよ、と(⑪)。自分で意図しないのに「不幸」巻き込まれる人もいるでしょう。偶発的に「不幸」となってしまった人たちです(⑫)。導いてくれる人がいなかったので、知らず知らずのうちに「不幸」を招くようなことをしてしまうのです(⑬)。」

## (2) 「呪詛」

「Q:主教様、人に「呪詛」(ラム lam)をかけられて職を失ったという人がいます。本当でしょうか?

A:「呪詛」を行うことを決意するには、それなりの理由があることでしょう(⑭)。私達は常にそうした人々に祈りを捧げます(⑮)。働きたいのにすぐに解雇されてしまう。そういうことが続くかもしれません。このような、「不幸」に人を陥れるような悪事を行うのは、深く考えてのことだと思います(⑯)。私達がともに暮らし、

ともに祈りを捧げる者たちのうち誰かが神の力に憑依されて、親たちに以前行った悪事が明るみに出され、そのせいでその人が苦しんでいるのだということがわかることもあります (17)。

祈りの最中に、許しを請わなければなりません (18)。

それから、親のところにも行ってひざまずき、許しを請わなければなりません (19)。そうすれば、親たちと、何が反抗的だったかを話し合ううちに、問題が明らかになるというものです (20)。

子供に不行状の許しを請われた親がやってきて意見を求められることもあります。そのケースでは、今では子供も救われています (21)。

私と教会のみなさんの立ち会った話合いのなかで、親も言いたいことを言い、子供も応じて話しはすすめられました。そのなかで子供の行状のうちの何が悪かったのか、しだいに親も具体的に話し始めました (22)。

それが、「呪詛」を解く鍵であり、「呪詛」の終わりと、「祝福」(シルワニ silwany)のはじまりなのです (23)。この場合には金銭問題がその一部でしたから、そこにいる教会のメンバーが、それぞれ手元にあるものを持ち寄って解決しようとなりました (24)。そうしたことで親が満足すれば、「さあ、行って仕事を探すがいい」(イカディ・イランギ・ティーチ・ペリン ikadhi irangi tich perin) といい、その人は「呪詛」から解放されるでしょう (25)。

Q: 親が何かを要求した後、「文化的な「解呪」をしたい」(「アミト・アカ・オケリ・ニヤシ・ノ・オイキ・ラミ・パカ・キサンデロ amito aka okeli nyathi no oyik lami paka kisandelo」) と言ったら、お認めになりますか？

A: そういうことはあります。誰かを許しを与えるときに水をふりかけたいという人はいますが、私達はそれを認めていません (26)。水は薬ではありません。「呪詛」から解放する、許すと一言口にすればいいのです (27)。

「呪詛」をかけられた側が許しを請い、かけた側が受け入れれば、それで十分なのです (28)。

水がふりかけられてもまだ「呪詛」をかけられた側に対する悪意が残っていれば、「呪詛」は依然として強力なままです。まったく問題は解決していないのです(29)。」

### (3) ルスワ

「Q:「ルスワ」(luswa)のような問題には、どう対処なさるのですか？ルスワは、外部から来るものではなく、自分の行動に由来するものですが(メノ・ティム・アマ・ケロ・ルスワ *meno tim padhano ama kelo luswa*)。

A:誰かがオバカ祖母と性交渉をもったなど、そういう問題も私達は「祈り」(クワヨ)だけによって解決します(30)。友人たちに悪事に対する許しを請い、神にも犯した悪事についての許しを請うのです。包み隠さず犯した罪を「告白」(クワヨ・チャック *kwayo chak*)しなければなりません(31)。神はお許しくださいます。

Q:「ルスワ」を払うために「ワンゴ・ルスワ」(*wango luswa*)を行う習わしです。そのために燃やす小さな小屋に入ることは認めますか？

A:私どものところに来た人々には、神から許しを乞うやり方を教えなければなりません。バプティズムについて教えるのです(ワ・フンジョ・バティスモ *wa funjo batisimo*)。神の存在を信仰し、「ルスワ」による災いが消え去るように祈らなければなりません。ひとたび救われると、どんな病でも治るのです(キロコラ・ボス・キシギモロ *kilokola both kisigimoro*) (32)。」

### (4) ティポ

「Q:「ティポ」(*tipo*)についてはどうですか？

A:「ティポ」は、人が死んだあとの人間の抜け殻のようなものです(アマラ・ギモ・ソ *amola gimo tho*) (33)。誰かを殺害した結果、手を汚した人と死体を発見した人に起こることです(34)。どれくらい「ティポ」を信じているかによりますが、



イエスの名を唱えるたびにその影響は弱まるはずです (35)。人は犯した殺害の罪を包み隠さず告白しなければなりません。「祈り」でそのことが言及されるたびごとに、「ティポ」は遠ざかるはず (36)。

Q：それで、ここに連れられてきた子供たちのことを思い出しました。病気に苦しんでいるときに連れてこられて、その病気が治ってもなお親族は誰一人ここには来ませんでした。「お祈り」に対して態度を変えたので霊がまた戻ってくることを恐れたのでしょうか？

A：親とか保護者達の態度によるのですよ。特に自分の屋敷で頻繁に供儀をおこなう人たちが問題です (37)。子供たちがそういった儀礼に立ち会うと、他の霊がたくさん集まるだけではなく、私達が追い払った霊まで戻ってきます (38)。

## (5) ルンベと夢

「Q：あなたは「ルンベ」(lumbe)を行いますか？

A：…人は死んで埋葬されたら、すべてが一応終わりです。あとは神の審判を待つばかりです。「ルンベ」は行いません (39)。霊はそれを招いた人のところに行くのです。霊を招かなければ、何も起こりはしません (ジュウォギ・ムウォンジョ・ジユマ・ジョ・ミト・ジョ jwogi mwonjo juma jo mito jo) (40)。

Q：「夢」(レック lek)については、どうお考えですか？本当のことだと思えますか？

A：夢にはいくつかのカテゴリーがあります。ひとつは、昼間起きているときにあることを深く考えていて、そのことが頭から離れないために見る夢です (41)。

Q：「夢」にみることに真実が含まれていることがありますか？

A：長老たちは、夢の中で神の言葉を聞いた (ウェレ・ルウォ・ギ・ジョ・イ・チュニイ・ジョ were luwo gi jo i chuny jo)、といいます (42)。しかし、未来に起ころうとしていること、現在起こっていることについて夢で見た、という主張は疑う余地があると思います (43)。

神は何かを人に語ることがあるかもしれませんが、その人も何かこれから起こることについて夢を見た、という言い方でしか言い表せないのではないですか？  
(44)」

## (6) 双子

「Q：ここパドラでは、「双子」(ルート rut) が生まれると「ヤオ・ルート」(yao rut) の儀礼をおこなう文化があります。「聖霊教会」では、どうするのですか？

A：「双子」は祝福された存在だといわれていますが、私達は、「ウォド・ルート」(wodho rut「双子を連れ出す」儀礼) や「ヤオ・ルート」はいたしません (45)。ただ皆で集まって「ムバガ (mbaga)」(宴) を張り、「祈り」を捧げるだけです (46)。我が屋敷にも双子はいますが、誰も一日たりとも双子のための祝福儀礼はやりませんでしたし、まったくやり方も忘れてしまっています。私達はただ、「祈り」で神に感謝するだけです。

Q：儀礼で受け取るべき「山羊」や「牛」について不利益をこうむることはありませんか？

A：「トーテム」(クウェル kwer) にかかわることはいつでも問題の種です (47)。その種の交換の習慣はどんどんエスカレートするばかりです。もし、交換が不平等だと思ったらその人は私に嫌がらせをしてくるかもしれませんから。やらなければいいことです (48)。」

## (7) 教会の将来

Q：主教様、この教会はいつ開設されたのですか？

A：1992年にできました。

Q：ここにおいていかれた子供たちをどうやって食べさせているのですか？その

ためのお金の出所はどこですか？

A：ポーリッジをすすっているでしょう？それは私どもの畑からとれたものです。いまやこの子たちは我が屋敷の子供たちです。学校にも通わせています（④）。最近保育園を開いたのですが、先生への給料が問題ですね（⑤）。

### 【解説】

まずは、「不幸」についての一般的な考え方、この教会での対処の方針を聞く。主教は、不幸は悪人にのみ訪れる、と説く（①）。子供を無垢なものと考え、まだ悪いことをしていないから（②）、不幸でもなく天真爛漫なのだと説明する（③）。「親」「オジ、オバ」など、子供が「怒らせない」（⑤）、「幸せにする」（④）存在としてあげられているのは、これまで見たとおり「呪詛」の主体となる関係者ばかりである。悪事に手を染めなければ「不幸」が訪れるはずがない（⑤）、という発言は間接的に、一般には広く認められている「呪詛」の正当性に婉曲的に挑戦する見解でもある。

「大人になればわかる」として「大人」の論理で子供を諭すことを批判し、靈的に成長してゆくはずの「罪から免れた」子供を、「不幸」に導く行為として批判する（⑥、⑦）。

このような、マイナスの予言さえなければ、子供は本当は、親を敬愛し、何の「不幸」にも直面せずに成長できるはずだというのである（⑧）。

すでに問題を抱えて教会を訪れた人間に対しては、「不幸」を追い払ってくれるよう神に祈り（⑨）、「不幸」を招いた原因である行為や行動の意味をわからせるような靈的に指導をするという（⑩、⑪）。意図していない行動が不幸につながった場合もありうるが（⑫、⑬）、それも導いてくれる人がなかったからであるとし、導きの教えの対象となる。

ここでは、すべて「不幸」の原因は意図してのものであれ、意図せざるものであれ、当事者の行動であるというある意味での「自己責任論」が徹底している。

「呪詛」の存在についても否定はせず、「悪事」としつつも「それなりの理由」(14)「深く考えてのこと」(16)であろうと同情的、あるいは共感的である。そういった人には祈りを捧げる(15)。また、婉曲的な言い方だが、教会の仲間内でも呪詛の被害者がいたこと、それが公になったことがほのめかされている(17)。

対策としては祈りの最中に許しを乞うことに加え(18)、「ひざまずき、許しを乞う」ことが必要であるという(19)。その後、話合いをして、何が問題だったかを明らかにする(20)、という。

「呪詛」の悩みで相談に来た親子の具体例では、話合いのなかで問題が明確となり(22)、それが「呪詛」を解く「鍵」であり、祝福のはじまりであるという(23)。しかし、ここでは金銭問題があったようだが、結果的には教会の関係者が代わりに賠償してしまっている(24)。

「賠償」と「話合い」による「和解」そして「ひざまずき、許しを乞う」こと、そしてさらに、「さあ、行って仕事を探すがいい」(25)という言葉による解呪は、そっくり伝統的な解呪の儀礼とコンポーネントは同じである<sup>9)</sup>。ただ、鶏の血、コンゴや水が用いられていないだけである。さすがに「水」を用いると同じになってしまうことは自覚しているのか、そういった要望は認めず(26)、許すと口にするだけにしており(27)、それで十分であるという(28)。

水を振りかけたりするかたちを整えても「悪意」が残っていれば問題は解決しないとする(29)。それはその通りだが、伝統的「ニヤパドラ」の「浄めの儀礼」では何よりも「和解」の意志が大切とされ、その合意形成のために被害者の父親の仲介でクランや周囲が意を尽くすことを考えると、かたちこそ伝統的な解呪を否定していても、伝統的儀礼の理念を批判しきれてはいない。

このように、否定すればするほど、この主教の話は、「ニヤパドラ」の論理構成の上に乗っていることが明確になってくるのである。

「祈り」によってどんな病でも治るはずなので(32)、ルスワもまず自分の犯

した罪を告白し (31)、さらには「祈り」のみによって解決し (30)、「ワング・ルスワ」は行わないという。

ティポは、死者の抜け殻で(33)、それ自体はたいしたことはない。殺害した人、あるいは運悪く死体を発見してしまった人の心の内面に起こることに過ぎない(34)。「祈り」によって、そのティポを信じる心の影響は次第に弱まるはずであると(35)。

このことについても、効果的とされるのは、「祈り」の最中の告白と、「祈り」のなかでの言及である。言及されるごとに「ティポが遠ざかる」(36)というのはティポの実在を認めているような、いないような曖昧な言い方ではある。

なかでも、屋敷で頻繁に供犠を行う大人たちは問題であり(37)、たくさんの霊を招いてしまうという(38)。そういった親から病気のときにあずけられたままの子供たちが教会にはたくさん養育されていた。

ルンベは行わない(39)。いったん死んだら終わりであり、生きている人間が招かなければ何も起こらない(40)という。生きている人にすべての原因を求めるこの考え方は、べつに特殊ではない。

ランギの哲学について説く Hayley [1947] によってすでに指摘されていることを再度想起しよう。彼がジョクについて説く原則の第一は、すなわち、「A. ジョクは、宇宙 (universe) に浸透している中立的な力のひとつであり、人間が用いることなしには、人間に対してよく働くことも悪く働くこともない」[Hayley 1947: 3] ということであった。

「夢」についての考え方は、次のマリアとは対照的である。昼間起きているときに考えていたことを夢に見る、というものである(41)。主教オドンゴは、いくつかのカテゴリーに分けて説明しようとしていたが、質問がそれを遮ってしまったようだ。後の二つは神の言葉を聞いた夢(42)、もうひとつは現在起ころうとしていることや未来についての夢である(43)。いずれにせよ、夢のなかでの予知には否定的である(43)。

現在起こっていること、これから起こることについては、夢を通さなくても神が語ることがあるとほめかしているが、それは「夢」という言い方でないを受け入れられない、ということだろう (44)。

アゴラ聖霊教会では「双子を連れ出す儀礼」も行わない (45)。皆で集まって宴会をして「祈り」を捧げるといふ (46)。

花嫁代償の類いは、問題だらけであるといふ (47)。確かにわれわれがあつめた「呪詛」の事例も花嫁代償に不満を感じたオジが主体になること事が多かったから、この指摘はその通りである。また、不満の種でもあるからやらないにこしたことはないといふ (48)。

この教会は、1992年に設立され、多くの子供が遺棄され、教会の畑でできた作物でそれを育てている。学校へも通わせている (49)。保育園も開いたが、先生の給料を捻出するのに苦労しているといふ (50)。

### 3 レジオ・マリア教会のマリア・アディキニの話

#### (1) 夢で召命

「私の運命は、はじめはレック (夢) として知らされました。しかしやがて声が聞こえるようになりました。はっきり「私は神だ」アニ・ア・ウエレ *ani a were* と言いました。「私は主であり、神である。お前を油と水で人を癒すことができる能力を授ける」(アニ・ア・ウエレ・イキド・チャコ・ボソ・ジ・ギ・モー・ギ・ピー *ani a were i kidho chako botho ji gi moo gi pii*) とはっきり言いました (1)。

この言葉を聞いたときに、私は起きて年老いた母のもとへ駆け寄りました (2)。私はビジョンで見聞きしたことをすべて話しました (3)。事実、ビジョンの通り、私はどんな病でも治せるようになり (4)、私自身がながらく病に臥せていたのですが、その病さえ治ってしまったのです (5)。そのことは、たちまち人々に知

られるようになり (⑥)、新聞でも報道されるようになりました (⑦)。それらはすべて、私マリア・アディキニ個人としてやっているわけではないのです。神がすべてをそのように導いているのです (⑧)。あなたが私のもとに訪ねて来ることになったのも私の功績なんかじゃありません (⑨)。このレジオ・マリア教会のリーダーの一人に私になったのも、みなさんがそう決めたことで私の力などではないのです。すべて神の御心です (⑩)。

私ははじめ、神の思召しで教会で一人で祈っていました (⑪)。いつもロザリオをもっているように、言われました (⑫)。病も治り、両親と、そして私の癒しを必要とする人々と暮らしています (⑬)。本当に祈るのに適切な場所を探して結果的にいくつかの教会を回りましたが、このレジオ・マリアの牧師さんの方針が私のものとぴったり合ったので、この教会の伝道活動に加わるようになったのです (⑭)。

私はまたビジョンを見ました。そのビジョンの通り、現在の夫と結婚し、二人の子供に恵まれました (⑮)。結婚して親元を離れ、そのとき通っていた教会から離れました (⑯)。その建物は現在は使われていないようです (⑰)。この場所に来て、支援してくれる人がいたわけではありませんでしたが、不安はありませんでした (⑱)。使っていない土地を寄付してくれる方がいて、また教会の建築に力を貸してくれる方々も現れて、現在の教会ができたのです (⑲)。ビジョンは、夢のかたちであらわれることが多いようです。朝めざめたら、夫にその夜に見た夢について話します。夢に見たことは必ず決まって、現実のものになるのです (⑳)。」

## (2) HIV の治療

「Q：1995年にHIVを治療したとおっしゃいましたね。

A：そうですね。その年、薬というのではなくて油と聖水で、なおった方が何人もいたことは事実です (㉑)。信仰の力のおかげでしょう。信仰がなければ、治る

ことはないと思います (22)。精霊に満たされて (メン・パ・チュニイ・マレン men pa chuny maleng)、聖水と塗油によってなおすことができます (23)。毎日、毎週、毎月、数えられないくらいの方々をそうやってなおしています (24)。

なかには私が一度死んで、よみがえったという人もいるようですが、それは違います (25)。私は病に伏してほとんど死にそうな状態から回復した、それは事実です。しかし死んだ、というのは事実と違います (26)。

しばらくは母と暮らしていましたが、今いるこの場所、夫のところに住むことに決めたのです (27)。」

### (3) ラブキ rabuk (報酬) について

「治った方から報酬をいただくことはありません (28)。私のこの力も神からただでいただいたものなのですから (29)。あなたが何かすすんでこの教会のために施しをするのは結構なことだと思います (30)。でも私が聖書を読んだり、将来起こることを見通したりする、そのこと自体にお金を払ったりお礼を持参する必要はないのです (31)。

Q：どうやってお母さんの住居に教会をたてたのですか？

A：1995年だったでしょうか。なおった人びとが信者さんとなり、数が多くなってきたので、LCI 議長 (地方行政の単位 Local Councils<sup>10)</sup> のオボ・シドロさんが、多くの人を収容する雨露や太陽の光から守られた建物が必要だと考え、計画を立てたのです。オボ氏はお金を集め、トイレを作り、小屋を建てました (32)。私自身が資金や資材をあつめたことは一度もありません (33)。本当にここは人が多いんですよ。食事の暇もないくらいです (34)。

私は、カタジュラ地区に1970年に生まれました。そのころは名前をアディキニ・スコヴィアと言ったのです (35)。私は全部で5人子供を産みましたが、一人は夭折しています。メン・パ・ウエレ men pa were (神の力) ! (36)



聖書を読みながら祈っていると、これから起こることや、すでに起こったことのうち知られていなかったことを言い当てることがあります (37)。この力が私にそなわってから、ずっと失われたことはありません (38)。人々をなおす力とおなじだと考えています (39)。たぶんお金や贈り物を要求したりすれば神は私からその力をとりあげるのではないかと考えています (40)。神はこの力を何の代償もなく私にくださったのですから (41)。ラブキは、実際には薬、つまり神が人々をなおす力を確実にするための薬草の代金と考えればいいかもしれません (42)。

Q：ほかの宗教の指導者が治療を受けに来ることもあるのですか？

A：(別の教会関係者の発言) はい、ありますよ。カトリック、プロテスタント、どんな宗教からも来ます (43)。中庭に木でできたナイフがありますね。あれはマリアがお祈りの時に誰かに憑りついた悪魔や死霊を追い払うために使うのです (44)。

A：(マリア) 神は、人間とコミュニケーションするさいに聖霊を用います (45)。主の戒めには従わなければなりません。ことのはじめは神は、私に「夢」をつうじて話しかけましたし、現在でもそうですが、現在の私にとっての神との交流する世界は、祈りの言葉なしには存在しません (46)。神に毎朝祈ることで、私たちは罪とがからきよめられて、清らかでいられるのです (47)。旧約聖書で禁じられた、穢れた動物、鳥、そして野菜は食べてはいけません (48)。」

### 【解説】

夢と現実との関係を少なくとも表向きは否定的にとらえるオドンゴ主教とは対照的に、レジオ・マリア教会のマリア・アディキニは「夢」で自分の運命を知らされた。病に臥せていたときのことである (5)。「夢」のなかで、「神」がはっきりと、「油と水で人を癒やすことができる能力を授ける」と言ったという (1)。

マリアは起き上がり、母に一部始終を話した (3)。神の言葉は本当だった。それ以来マリアは自分自身も病を克服し (5)、どんな病でも治せる力を得た

のだった (④)。そのことは、やがて周囲に知られるようになり (⑥)、新聞報道もされるようになる (⑦)。

マリア自身は、治療する力は自分という個人に属しているのではなく (⑧)、その効果についての風評も (⑨)、レジオ・マリアの指導者となったこともすべて神の御心であるという (⑩)。当初はロザリオを常に携行するようにいわれ (⑫)、一人で教会で祈っていた (⑪)。いくつかの教会を回ったが、現在は方針があっているレジオ・マリアに加わり (⑭)、家族とともに暮らしている (⑬)。

結婚さえもビジョンで予言されていた。そのとおりの夫と結婚し二児の母になっているという (⑮)。あわせて当時の教会からも離れた (⑯)。ここに来たときにも知人や援助を期待できる伝があったわけではなかったが、不安はなかった (⑰)。自然と寄付者が現れて現在の教会ができた (⑱)。

かつて自分が属していた教会は現在は使われていないようだ (⑰)、という。かつての教会の荒廃についてさりげなくコメントしているが、どういう感想を持つのか、あらためて聞き直さなかったのは迂闊であった。

ビジョンは夢のかたちで提示される。朝その前の晩の夢について夫と話すのが日課となっている。それらの内容は現実化するという (⑳)。

1995年には、「信仰の力で」(㉒)「聖霊に満たされた」水と油を用いて (㉓) HIV患者を何人も治療している (㉑)。現在も毎日数え切れない患者を治す (㉔)。

召命前にマリアを苦しめていた病は深刻だった。ほとんど死ぬだろうと思われていたところから、一度死んで蘇ったという風説もあるが、それは否定した (㉕)。あくまで死にそうな状態から回復した、というのが真相である (㉖)、ということだ。現在は夫と教会の別棟に住んでいるが、かつては彼女は母親と同じ小屋に住んでいたようである (㉗)。結婚した娘が母親と住んでいるのはパドラの一般常識では「異常」なことに属する。ありていにいえば、「ジャジュウォキ」(ウィッチの訳語として定着している) である<sup>(11)</sup>。

報酬についての考え方は、すでに見た二者と大きく異なるところはない。教会への施しは結構だが (30)、「力」は、神からもらったものなので (29)、それに対する代価はとらない、という考え方である (28)。ただ、興味ぶかいのは、「将来起こることを見通したりする」すなわちアドラ語でいうシエシ (*thieth*) (予言) を肯定してしまっていることである (31)。また、先のオドンゴは、水の使用を否定し、用いるのは「聖書」と「祈り」のみであることを強調したが、ここでは「油と水」を用いるということで、ジャシエシとの行動面での親和性も有している。これらの点については最後に論じる。

ここでは、母親の小屋が教会になっているが、LC1 議長のオボ・シドロ氏が募金を募り、小屋とトイレをつくったこと (32)、自分では資金を集めていないこと (33)、などが強調される。信者は治療の結果治った人々が集まってきたので手狭になったのだという。「食事の暇もない」ほどの忙しさだという (34)。

アディキニ・スコヴィアは本名だが、旧名あるいは俗名のような語り口で語った (35)。子供が5人とのことで (一人夭折) ある (36)。現在の夫との子供は2人なので、離婚歴があることがわかる。ただし、アドラでは離婚は一般的ではないので、このことも重要なポイントである。

これから起こることを言い当てる予言の能力がずっとそなわっており (37)、失われたことがないが (38)、神は何の代償もなくくれた力だから (41)、代価をもらったら失われるのではないかという (40) 主張を繰り返すが、実際には受け取っているのだから、薬草代金という説明を付け加えている (42)。しかも、「神が病人をなおす力を確実にするため」に薬草を用いることも認めた。

別の宗派の人間が治療を受けに来るのか、という質問に対してはマリアが答えるより先に他の教会の指導者が、どんな宗派からも治療に来ると語っている (43)。悪魔祓いの儀式を行うこと、しかもその時に木製ナイフを用いて追い払う所作を行うことが推測されるような発言が認められる (44)。

神と人間の間には「聖霊」がおり (45)、「夢」と並んで「祈り」が神との交

感にとって重要であることが強調される (46)。宗教者らしく毎朝祈ることで罪から免れることを奨励し (47)、旧約の食物禁忌を確認する (48) ことでインタビューは締めくくられた。

#### 4 夢 (レック *lek*) の観念

最後に、ここで触れられた夢の観念について補足的な資料を検討したい。

マリア・アディキニに会った後、資料をまとめる過程で、マリアは「夢」を「ビジョン」と見なしていたことに気づいた。マイケルやポールによると、多くの場合「夢」と「ビジョン」は区別されないという。また、オドンゴ主教のテキストのうち、夢と現実について語る部分、とくにカテゴリーのことがわかりにくかったので、別の長老に夢についてのインタビューを試みた。本稿のテキストのなかで、この部分だけは「聖霊派教会」関係者とのインタビューではない点に注意されたい。

「Q：夢のタイプについてお話いただいたのですが、もう少し詳しくお話しください。

A：以前も少し述べたことですが、私たちの夢はいくつかのタイプがありますね。ひとつは、よく覚えていること、深く考えていることが夢に出てくる場合(①)。じっさいに実現することもしないこともあります。たらふく夢のなかで食べ物を食べた夢を見ても、目が覚めてがっかり、ということはありませんよね。大金を手にした夢を見て大喜びしていましたが、目が覚めて、それが夢だった、ということもありました。似たものとして、何かいいことがあって来客があり、肉を買ってきてお祝いをしている夢を見ることもあります (②)。

あまり楽しくない夢としては、動物がそとで待ち構えている、そんな夢も私にとっては比較的よく見る夢です。人に追いかけられる夢もよく見ます (③)。一時

見た夢では、大金でいっぱい箱を手に入れた夢を見ました。それは、神がそのときよくつきあっていたオウィノ・アントニオ<sup>12</sup>という人を通じて大金をくれる、というメッセージ性のある夢でした。起きてからその夢の話をオウィノにしましたが、そんな予定はない、と彼はっていました。どういうことかわかりませんが、それからすぐにオウィノはなくなりました (④)。

死んだ人が夢に出て、生まれた子供に自分の名前をつけるようにと希望をいったり、強制したりすることもあります (⑤)。ずっと以前、子供が名前をつける前に亡くなったことがあって、その時にそんな夢を見たことがあります。

霊のしわざで見る夢もあると思っています (⑥)。夢で死んだ人にあうことがあるでしょう。それはその死霊がその夢をもたらしたのだろう、と考えています。霊によってもたらされるチェン chien の一種です (⑦)。ライオンや豹のような野獣に追いかけられる夢を見るがありますが、それは死霊の仕業です。死霊に何か不満があるか、あるいはその人に何らかの不幸が訪れる前触れです (⑧)。たとえば、戦場で亡くなった祖先や親族がいたとします。そうして自分の屋敷に遺体が埋葬されなかった場合、遺体を屋敷に連れ帰って埋葬してほしいということで、そうした夢を見せるのです (⑨)。

誰か知っている人が死ぬ夢を見て、実際に目が覚めたら、亡くなった知らせを受けた、ということもありますが、そうした夢を見ても夢のなかで亡くなった人が実際には生きていることもあります (⑩)。それはたぶん、何らかの理由で死霊が満足したために、当の人を殺すことがなかった、ということなのでしょう (⑪)。でも一般には、誰かが夢で訪れてくるときには、まさに死にそうで、夢のなかで別れを言いに訪れる、というケースが多いようです (⑫)。霊と一緒に動き回る夢 (レック・ウォルス・ギ・ジュウォギ lek wolph gi juogi) を見る場合があります (⑬)。

Q：年長の方々がいうように、その夢に見ることというのは本当ですか？ 実現することが多いのでしょうか？

A：年長者たちのなかには、夢は真実だと考える人もいますが (⑭)、もともと予

測していたことがじっさいに起こった時に、夢に見た、と言いつの人もいますよね (15)。神は誰かに話しかけているのかもしれませんが、その人がしかじかの夢を見た、と他人に語らないかぎりはそのことはわかりませんね (16)。

しかし、夢は現実であり、私にとっては、現実の少なくとも一部です (17)。

Q：多くの人が「夢」と「ビジョン」(メニロック menyirok) を区別しないで考えているようですが、正夢(レック・マラ・デイエリ lek mara dyeri) を見ることがありますか？

A：はい、誰かが私を逮捕しに来るような夢を見ました。眠っていたときでした。目が覚めたときに誰かが小屋の扉を叩いているのが聞こえました。アスカリ(警備員：スワヒリ語) が小屋のところへやってきてノックしていたのです。私は逮捕されてしまいました (18)。夢見のずっと後、たとえば10年も前に夢見たことが実現することもあります (19)。ここの、沼地からこちら側の土地を私は5頭の牛と、11頭の山羊と引き換えに買いました。かつてたくさん持っていた牛を私はいまは持っていません。何頭か持っていた山羊も最近死んでしまいました。そういった問題がおこると、ジャシエシのところを訪ねて相談するのです。門のウエレ、ブッシュのウエレ、そして屋敷のウエレの機嫌を損ねたからだ、などと教えてくれるでしょう (20)。そのウエレは皆同じものです。天地を創造した創造主は一つですが、それを別な呼び方で呼んでいるだけのことです。入口をつかさどるのは、門のウエレ、屋敷を守るのはディオディボ、そしてブッシュについては、ブッシュのウエレ、というように。天地を創造した神はひとつです。』

### 【解説】

この話者は、オドンゴ主教も述べていたことだが、よく覚えていること、深く考えていることが「夢」に出てくる場合 (1) について指摘する。この場合でも(ごちそうを食べるなど)非常に楽しい経験を夢のなかでする (2) ことがあるが、それは現実世界とは関係がない。動物が外で待ち構えている夢、人

に追いかけられる夢もよく見るという (③)。知人が大金をくれる夢も見たが現実とは関係がなかった (④)。ただし、その後、夢のなかで大金をくれた人はなくなっているという (④)。死者が子供の命名に干渉してくるときに夢に出ることがあるという (⑤)。しかしそのケースでは、子供に名前をつける前にその子は死んでしまっていた。このあたりから話はキリスト者らしくなくなってくる。霊の仕業で見る夢があり (⑥)、それはチェンである (⑦)。野獣に追われる夢はチェンであるか、不幸の前触れである (⑧)。たとえば戦死者が遺体を屋敷に連れ帰って欲しいというメッセージであるという (⑨)。

知人が死ぬ夢を見て、当たることも外れることもあるが (⑩)、この場合話者は、死霊は本当は当該人物を殺すつもりだったが、何らかのかたちで満たされてやめにした (⑪) と解釈する。

死が間近な知人が死に際に別れを言いに来るのは一般的であるという (⑫)。死霊と一緒に動き回る夢も、ひとつのジャンルとしてあるようだ (⑬)。

年長者がよく言う「正夢」については (⑭)、もともとと予測が当たったときにそれを言い出す例が多いという立場をとる (⑮)。それが神からの啓示だとしても「夢」以外の言い方では人には言えないだろう、という考えはオドンゴ主教と同じ考えである (⑯)。

目が覚めると現実には夢で経験したこととは違う、とはいいつつも「夢」は現実の一部であるという立場をとっており (⑰)、夢が現実のものとなり逮捕されたこともあると主張する (⑱)。夢見から実現までは時間的な幅があることが想定されており、ときには10年以上かかることもあるという (⑲)。

文脈とは直接関係ないが、⑳のようにこの話者はジャシエシの診断に対する信頼とウェレ信仰は維持しており、キリスト教の教えと併存していることがわかる。

一般にはアドラは「夢」と「現実」との区別を独自のかたちですることが多く、一概に「虚実」の二分法で判断しない。また、「夢」=眠っているとき、「ビジョ

ン」=起きているとき、のような二分法も不分明である。しかし、以下のような話者もいる。

…夢は事実ではありません。ずっと気にしていることが夢に出てきて、それを事実と考えたり、解釈したりするだけのことです。それに実際に問題をたくさん抱えていてそれが夢に出てきたとします。現実にもその不安が的中して結果的に夢が実現することはありますね。アミンがインド人をウガンダにとって悪い兆しと夢見て、90日以内に国外退去を命じたことがありましたね。あの有名な宣言が行われたのは、トロロのルボンギ兵舎でのことです。例のACKもそこにいました<sup>13)</sup>。その夢が本当かなんて私にはわかりません。しかし、ビジョンは、困難に直面しているときに見えやすい、ということはほとんどの人が同意することです。…

トピックも時事問題を例に出すなど、近代的な関心を前面に出す話者だが、結局「わからない」とし、「困難に直面していると夢を見る」という程度の結論に落ち着いて、現実世界との連関を緩やかながら認める結果となっている。

### III まとめと考察

まとめよう。

1. 彼らは、「聖書」と「祈り」のみを用いた「ビジョン」による（とくにⅡ.1と2）、水と油のみを治療に用いる（Ⅱ.3）と強調し、儀礼のシンプルさを主張する。しかし、2も盥を用いる例外があり、しかも3は草や木製のナイフをもちいた悪魔祓いを行う。基本的な「呪詛」の解呪コンポーネントは、チョウウォ・ラミ *chowo lami*（「「呪詛」を浄める」）とあまりかわらない。「水と油」を用いると外見的にも似てくる。



2. II.1については「憑依」が肯定的に「ビジョン」として読みかえられている。通常は多くの憑依は「霊からのメッセージ」として「死者の要求」を果たすと治癒することが多かった。別稿で取りあげるが収集された資料のなかでは例外的なものとして、失敗に終わったが「ジャシエシになるように祖先が召命」というパターンがあった。しかし、この場合、「ビジョン」というかたちでさまざまな病に対する処方箋が伝えられる。その対象の多くはシココ、キダダなど「ニャパドラ」の「災因」である。

3. II.1は、「天使」と「聖霊の力」で「ビジョン」を通じて見るのは「草の抜き方」である。3は、ラブキを「力」ではなく「草」の代金として根拠づける。

4. ラブキは、「基本的にはただで与えられた力なので不要」だが、教会のためには「治ったらお礼」すればよいとの考え方は共通する。受け取ったら「力」は失われるとの考え方も共通している。ジャシエシとの差別化をはかるのはこのあたりだが、せいぜい前払いではない、額が安いというほどの違いしかないようにも思われる。

5. とくにII.2に顕著だが、人間は本来無垢と前提し、霊的な成長がうまくいかないために「霊」を刺激して「不幸」を呼び込んでいるとの考えを主張している。しかしこの考え方自体は、Driberg [1923, 1936] やそれを踏襲したHayley [1940, 1947] の「力」の考え方をむしろ裏づけるものであり、目新しいものではない。

6. II.3は、きわめて重い病を克服した経験から語りおこされる。しかも「ビジョン」というより「夢」で「予言」(シエシ)も行う。離婚、母と同居など、ニャパドラの慣習からすると「ジャジュウオキ」とされそうな生活形態である。

7. アドラでは夢の観念は非常に重要である。正夢の観念もあり、死霊との回路とも考えられている。とくにⅡ. 3で「夢」と「ビジョン」との区別が明確でないところを、かなり体系的にすべてビジョンとみなし、神の意図を読み解く点に、アドラに支持される基盤があるように思われる。

このように、彼らは、ニヤパドラの「災因」を相手にしない既存のキリスト教の受け皿となって勢力を伸ばしているといえるだろう。ジャシエシを否定しながらも結局はニヤパドラの「災因」の解決にこたえることで同じ役割を担っているといえる。しかも彼らがその教会や「神の力」の根拠を語るときの論理基盤はすべてアドラの「災因論」である。

とくに6でまとめたように、離婚したりして落ち着かない、あるいは「子供の夭折」などは、彼らが宗教家ではないふつうの平均的アドラ人ならば「[呪詛]の結果」と見なされてもおかしくない。かつてならチョウォ・ラミの対象であったらう人物が、その条件を逆転させて、「奇跡」として肯定的に提示することに成功しているともいえる。

むしろ逆に、否定形で語られる彼らの描くアドラの文化は、こちらがトピックをある程度誘導的に質問している側面はあるにしろ、「双子」や「ルスワ」など、当該文化の本質を浮かび上がらせる結果になったと考えられる。そういう意味ではウガンダのテソの間で勢力を広げるPAG (Pentecostal Assemblies of God) とカリスマ派 (Catholic Charismatic Renewal Movement) の調査をした長島 [2007] が、「文化は悪魔」としたのは、出発点としては適切だったであろう。つまり、彼らはそれまでの文化を「悪魔」と見なしつつも、逆転したかたちでその実践や教義の内部に取り組みざるを得ないのだ。もともとキリスト教の「悪魔」は墮天使であり、神の論理をすべて知った上で闘争をいどんだ存在であることを思いおこせば、ポジとネガのたとえを例に出すまでもなく

彼らが否定形で語るアドラ文化がその本質を鋭く突いていることも納得がいくであろう。

本稿では、梅屋 [2008, 2009] で取りあげた言説のような、一般の話者とは立場の若干異なる特定個人との対話を詳しく見ていくことで、いくつかの「伝統的」と思われるアドラの観念についての見解が、梅屋 [2008, 2009] の話者とは異なった特定個人のなかでいかに理解されているのか、またそれが、どのようにその概念を共有していない外部の人間に対して語られるのかを紹介してきた。また、言及される概念が同じであっても立場の違いによって同じ観念に関する理解が異なってくる点にも注目する必要があるのは当然である。言うまでもないことだが、他の諸社会と同じく、アドラ社会も決して一枚岩ではないのである<sup>14)</sup>。

## 注

- (1) 「パドラ」は、アドラ Adhola というこの民族の伝説上の創始者の名前に場所をあらわす接頭辞 *par* が接続されたものである。「アドラ」という名前は、ウドラ *udhola* (アドラ語で傷を意味する) 傷に由来しているといわれ、その手傷で機動力を失ったことが、創始者アドラがケニア・ルオの始祖とされる弟オウィニイと袂をわかち、当地に留まった理由の一つとされる。ここでは、民族名をアドラ、居住地等をパドラ、言語をアドラ語と表記する。「パドラ」という地名は、かつて行政区の名前として一時流通していたことがあるが、今日でもアドラ人は、「パドラ」の語で、その民族の習慣やルールが通用する一定の抽象的空間を指す意味で用いることも多い。具体的な個人としてのアドラ人は、具体的な居住地域としての「パドラ」以外にも、ウガンダ首都カンパラや海外にも多くの数が居住しているが、「パドラ」をホームランドと認識する意識を持っている。現在「アドラ」としてのアイデンティティは、基本的には文化と言語に大きく依存している。中央集権的な組織をもたないこの集団の場合、文化には、民族全体に共通する確固としたスタンダードが明確にあるわけではなかった。歴史的には長期間にわたり、南下してきたいくつものグループと、それぞれと接触をもったグループとが寄せ集まってできたと考えられている「アドラ」は、葬式その他の儀礼や慣習に関して、クランごとの違いが甚だしいことが知られている。
- (2) レジオ・マリア教会については、アフリカ最大の AIC のひとつとして研究が進められ

ているが、本論文では詳しく扱うことはできない。たとえば、Schwartz [1989, 2000, 2005]、Kustenbauder [2009] など参照。とくに Schwartz [2005] は、「夢のビジョン」についての言説を分析したもので本稿のテーマのいくつかと関連が深い。

- (3) 資料の集め方の詳細については梅屋 [2009, 2014b] のほか Owora [2016] Oloka-Obbo [2016]。基本的にはインタビュー資料を録音し、現地語で書き起こして「テキスト」とし、そして英訳し最後に和訳するという一連のプロセスのなかで、アドラ語版、英語版、日本語版の三つのセットをそろえることを目標として作業を続けている。
- (4) 「テキスト」については梅屋 [2009] に若干の議論があるが、ここでは何語にせよ逐語的に書き起こされたものをそう理解しておけばよい。
- (5) 教会関係者のあいだでは、シココやタークは、手に負えない病として認識されている。

次のテキストに見られる見解は、教会の常識的な認識を反映しているといえるかもしれない。「最近新しい病気が蔓延している。人間の体のなかから石とか骨片が出てくるといふ病気だ。そういった異物を人間の体内に放り込む力をもつ、そういうタイプのウィッチなのだという。この問題には私は立ち入りたくない。私は教会の指導者でもある。その立場から言えば、これはすべていかさまだ。ガラス片とか、石とか、壊れたガラス瓶、そんなものを患者の服を脱がせて体をなで回し、そして取り出していうのだ。「これらはすべてあなたのおなかのなかから出てきたのですよ」絶対そんなのはうそっぱちだ。

ある朝早くに、真実を知りたいと私はそこに行ってみた。石切場の向いにそのジャシエシはいた。女がひとり、立っていて、私にそこで見ているようにいった。いうままに見ていると、女は葉や石をとりだして見せた。そして私にも服を脱ぐように言い、それを奪うようにして私の腹に手を当てた。そしてそこから割れたガラス瓶や石を放り投げた。「これがあなたを殺そうとしていたものだよ」まさにほんもののガラス瓶だった。こんなものが出てきたというのに、私の腹には傷もついておらず、血も一滴も流れていない。本当に腹から出てきたのか私は疑った。次の日、私はガラスをポケットに入れて持っていた。彼女はポケットのガラスのことは全く気づかなかったが、同じようにガラス瓶や石を取り出した。このことでわかるように、彼女は別に体のなかにあるものを透視してそれを取りだしているのではない。ただの詐欺師だ。」

Ocholla-Ayayo [1976] は、「ジャシホホ *jasihoho*」と「ジャターク *jatak*」を紹介している。報告を読む限り、前者は「邪視」を用いた「邪術師」で、その力で料理できないものを料理に見せかけて食べさせたりする。そのようなかたちで食べ、消化されないモノを取り出す「手術」を行うのが「ジャターク」だという [Ocholla-Ayayo 1976: 161-162]。アドラでは、「シココ」と「ジャターク」の役割分担はそれほど明示的ではないもののほぼ対応しているが、体内にとりこまれたものが食べ物ではない点、いわば超能力の遠隔瞬間移動現象（アポーツ現象）のようにとらえられている点に特

徴がある。

- (6) ジャシエシ *jathieth* とは、シエシ *thieth* (予言) を含む診断、治療をつかさどる伝統的治療医と考えておいてさしつかえない。詳細やそのバリエーションについては、梅屋 [2008, 2009] 参照のこと。
- (7) 顧客獲得に熱心な「ウィッチ・ドクター」の広告は、新聞紙上でも見ることができる。たとえば、『ニュー・ビジョン』2004年の9月15日号の広告欄には、次のような広告を見出すことができる。

…伝統医、ムボザ・ミランディアラ博士、不妊、盗難の予防、家族の問題などでお悩みの方は、ご相談ください。電話番号 2 071681568 セグク (クムカザ) エンテベ通り…

ここ数年は、『ニュー・ビジョン』や『モニター』といった主要英字新聞からはこの手の広告は姿を消したようだが、タブロイド紙である『レッド・ペッパー』には男性機能回復や早漏防止のための成分がよくわからない薬の広告に混じって散見される。2014年2月14日の『レッド・ペッパー』28ページの広告欄からいくつか例をとろう。

…バルハン・マッジ・マレフ博士

アフリカの医療を調査研究するためアフリカ全土を踏査していたモンバサ出身のバルハン・マッジ・マレフは先頃カンバラに帰ってきました。以下のような問題を治療、相談にのります。

1. 梅毒、淋病、皮膚疾患、潰瘍、高血圧。
2. 男性機能回復、勃起不全の解消。
3. 「狂気」(括弧は梅屋、原文は *madness*) の治療、経済的な問題の解決、就労問題、顧客増加など。

カウエンベ、チック・ホテルすぐそば、電話 0752 385891/0773 385891…

…ムゼー・ムキマ・ザンガ

神聖な槍をつかって地球上のあらゆる問題を解決する、タンザニアの神秘、ムゼー・ムキマ・ザンガ。

- ・銃を用いずに泥棒を捕獲
- ・失せものさがし
- ・結婚問題になやむカップルの相談
- ・借金返済不履行相談

- ・不安定な関係を解決
  - ・失った恋人がかえってくる
  - ・雇用問題の維持
  - ・ビザがほしい人、など
- 連絡ください 電話：0782-231 999…

…ラフィク博士

電話：0778 252 526,0759 986 527

Email: doctorrafiki@gmail.com

薬草の最高権威、以下のことが専門で定評があります。

- ・失った恋人がかえってきます。不実な恋人がたった二日で誠実になります。お礼は効き目があらわれてからで結構です。
  - ・男性能力増進。大きく、強く勃ちます。
  - ・しまりをよくします。ぬれにくい女性をぬれやすくします。
  - ・100パーセントあなたの望む恋人がみつかります。
  - ・美容とバストの垂れ防止。
  - ・就労機会の開発。
  - ・運が良くなるまじない、就労機会と入札、契約、金融取引などの経済的相談。
  - ・事業やスポーツでの成功。
  - ・厳しい法廷闘争。
  - ・あなたの命、家庭、財産をまもる自然の兵器。
  - ・必要なお金を手に入れ、財産をまもる力。
- 場所はブレンガ、アフリカ銀行の向かい…

こうした「都市型」ともいうべきドクターたちは、泥棒避けと病気、ビザの取得などの能力を訴える。この場合も「モンバサ出身」「タンザニアの神秘」など多くは異民族出身で、旅をして薬草などの「もの」を手に入れ、治療の能力を得た、と主張する例が多い。自らの半ば以上演出された外部性が売り物でもあり、その経歴を秘密のベールで覆うためもあってか、あまり具体的な経歴に関するインタビューなどに応じられることは少ない。

- (8) アリス・ラクウェナ Alice Lakwena (1956—2007) は、本名アリス・アウマ。アチョリ民族出身の霊媒で宗教的ゲリラ、聖霊運動 (HSM: Holy Spirit Movement) の指導者。二度の結婚を経験したが子供が生まれず、故郷を離れて孤独に暮らしていた。あるとき突如正気を失い、視力も聴力も失った (1985.5.25)。この時に、ラクウェナ (「メツ

センジャー」の意) というイタリア軍人の霊に憑依されたのだという。父が11人もの伝統医のところへ連れて行ったが、状態は改善しなかった。パラ国立公園(現在のマーチソン国立公園内)で40日間失踪し、戻ってきたときにはカトリック教徒でありながらアチョリ民族の伝統的な霊媒となっていた。このときの体験が後の聖霊運動(HSM)の中心的な聖典となる。アウマは、すべて、ラクウェナに導かれてのことだと述懐した。ティトー・オケロ政権(1985.7.29—1986.1.26)末期までは、アウマはウガンダ北部のグルの街で占いや霊的な治療をする無名の存在だった。第二次オボテ政権が成立し、激しさを増すムセベニ率いる国民抵抗軍(NRA)と、ウガンダ人民民主軍(UPDF)のゲリラ戦のさなか、占いや霊的な治療は無意味であるから、HSMを組織して悪を滅ぼし、血を流すのをやめさせよとラクウェナに命令されたという。このミッションは首都カンバラの奪回も含んでおり、それを果たして初めて、最悪の被害を出したルウェロ三角地帯で虐殺されたの市民の死霊からアチョリたち自身が解放されることになるのだという。アチョリの伝統的な霊媒にはないことなのだが、アウマは目的によっては他の聖霊たちに憑依されることもあった。それもまたラクウェナの導きなのだとアウマはいう。劇的な勝利を次々におさめ、アウマとHSMはカンバラに南下し、ムセベニ率いるNRAに苦汁をなめさせられた他民族の熱烈な支持を獲得する。このテキストで語られているのはこのころのことだろうから1987年の終盤であろう。しかしひとたび敗色が濃くなると、アウマは破滅的な結末に社会を陥れるために聖霊を用いるウィッチだという内部告発がなされるようになった。カンバラ近くの森で集中砲火を浴びてHSMは敗走し、アウマはラクウェナが自分のもとを去ったとして、逃亡した。それからはずっとケニア北東部州ダダブ近くのイフォ難民キャンプに住んでいたが、子供の人身売買に関わっていると疑いをもたれたこともあれば(2004)、HIV(AIDS)の治療法を発見したと発表したこともある(2006)。体調を崩し、一週間ほど煩った末に死亡(2007.1.17)。病名は不詳。神の抵抗軍の指導者ジョセフ・コニイ(Joseph Kony 1962—)に強い影響を与えた。一時はコニイはアリスのオイとされていたこともある。HSMの人類学的研究としてBehrend[1999]がある[梅屋2013a]。

- (9) 解呪の「浄めの儀礼」は、以下の手順で行われる。①ジャラーミ(jalami 呪ったもの)の小屋の戸口で行われる。決められた地点から戸口まで跪いたままあるくことを要求される例もある。②供犠し、その血をコンゴ、すり胡麻ペーストと混ぜて振りかける。③水を屋根から流し、屋根からしたたってきた水を受けてジャラーミの手ずから男性なら3回、女性なら4回飲む。ジャラーミも飲むという報告もある。④解呪の呪文を唱える。一般的には、すでに口から出た呪詛の言葉の内容を取り消し、祝福を述べる。⑤共食、共飲。「骨嚙り」の要素を取り入れ、同じ皿で同じ骨付き肉を嚙る方法を折衷することもあるが、それは解呪よりもその後の人間関係を考慮して和解を強調するケー

スに多い。⑥ジャラーミから犠牲者は籬をもらう。この籬が無事育つかどうかで儀礼の成功が占われる。⑦振り返らずに帰宅する。振り返ってしまったら儀礼は無効となる。解呪の実感はすぐにあらわれるとされる。

- (10) 地方行政の単位は、広域なほうから、district (県) と、county (郡)、sub-county (準郡)、parish (区)、village (村) ないし zone (地域) である。それぞれの行政組織が小さいものから LC (Local Council) 1 (村に対応)、LC2 (区に対応)、LC3 (準郡に対応)、LC4 (郡に対応)、LC5 (県に対応) として組織される。LC3 以上は有給の地方行政職となり、警察権も有する。準郡の役場にはたいてい拘置所も付置されている。1 から 5 まで、数字がおおきくなるほど範囲が広がる。LC は、もともと、ムセベニ率いる NRA (National Resistance Army) が、地元支援組織として組織した RC (Resistance Council) が 1993 年公付された地方自治令 (Local Government Statute, 1993) によって改名され、1997 年の地方行政法 (Local Government Act, 1997) により法的根拠を与えられたものである。この 1 から 5 に至る LC にはすべて国会を模した議会があり、役職者が選挙で選ばれる (LC、3、5 は直接選挙、2 と 4 は間接選挙)。Local Government Act No.1 of 1997, Section 48 (1997 年 3 月 24 日公布) によれば、副議長、書記、情報・教育・地域活性化、治安、財政、環境、女性委員会議長、青年委員会議長、障害者対策など国会や内閣を模した役職がある。

- (11) パドラでジャジュウォキ (jajwok) とは何か、と限定なしに質問すると、まず最初には「ナイト・ダンサー」(東アフリカでより一般的な英語名はナイトランナー) についての説明がなされることが多い。夜中に服を脱ぎ捨て、その体に灰を塗り、肛門から光を放って、人の屋敷で夜どおし踊り狂う。踊っている最中にも灰を頭から、胸から、肩から、全身にふりかける。彼らの「性癖」として言及される一連の所作、すなわち、小屋の扉を背中からノックする、腰のしゃれこうべが、「カトゥール、カトゥール、カトゥール」という音を立てる、屋敷に足跡を残していく、などの行為には、殺人や、盗み、姦通などのような深刻な犯罪性はいっさいない。脇の下から「チヨ、チヨ、チヨと籬のような音」を出す、足を高く上げて首の後ろにひっかけたりするなど、何ら他人の社会生活を脅かしたり、影響したりするものではない。これらは「性癖」や「病」として、本人の意思にかかわらず継承してしまうこともあれば、騙されて他人の意図で「ナイト・ダンサー」にされてしまうこともあると考えられている。しかし同じ「ジャジュウォキ」の語彙で呼ばれるもういっぽうの極として、反社会的なジャジュウォキが想定される。「ウィッチとしてのジャジュウォキ」である。それは、他人に毒を盛ったり、他人の足跡のどろを用いて邪術をかけたたりする。また、腰に下げた袋の薬で通りがかりの畑を不毛にし、悪意をもってウィッチクラフトをかけ、死霊を使役する、反社会的存在である。このジャジュウォキの被害に遭った場合には、最悪の場合、命を失う



ことがある。まさに忌避すべき存在である。

人々が捕獲の方法を開発したり、実際に捕獲して私刑の対象にしたりするのは、まさにその「ウィッチ」としてのジャジュウォキの凶悪性、および反社会性ゆえであり、ひとたび容疑者を見定めたならば、額に釘を打ちつけ、尻や陰部にバナナの茎を押しこむ、といった方法で魔女狩りよろしく拷問するのもそのためである。ウィッチとしてのジャジュウォキは、こうした恐ろしい存在だ。

- (12) 妻のドロシー・アントニオがシワ（地名）の小学校で教師をしていた、近隣では有名な金持ちであった。アントニオはアドラ出身の政治家ジェームズ・オチョラ（James Ochola）の親友であり、1972年にオチョラと同時に行方不明になった（謀殺されたとみられる）。ジェームズ・サイラス・マリロ・オンドア・オチョラ（James Silas Malilo Ondoa Ochola, 1924—c1972）は、第一次オボテ政権（1966—1971）で国務大臣を歴任。1971年のアミン大統領のクーデターによって公職を離れる。1972年9月より行方不明。1973年アミン大統領が公表した85名の失踪者リストに、「行方不明。国内にはおらず、行く先を知るものは誰もいない」と記載。旧ソ連との密接な関係が疑われていた。
- (13) イディ・アミン Idi Amin Dada Oumee（1925年—2003年8月16日）は、「経済戦争」と称して、ウガンダ人の手に経済を取り戻すとの名目で、アジア人（多くは英国籍インド人）の国外追放を命じた。象徴的なのは、1972年8月4日には、90日間以内に国外退去というアジア人追放のスピーチであるが、この決定は「神のお告げ」とであると公言している [Republic of Uganda 1973]。この演説はトロロ（パドラは行政区としてはその一部であった）のルボンギ兵舎で行われたのでパドラではよく知られている。現地でACKとして知られる人物は、アルファクサド・チャールズ・コレ・オボス＝オフンビ（Arphaxad Charles Kole Oboth-Ofumbi 1932年7月12日—1977年2月17日）で、当時アミン大統領政権下での国防大臣であり、このスピーチにも臨席していた。後にアミンに謀殺されたとされる。詳細は梅屋 [2011, 2013b, 2016a] 参照。
- (14) いわゆる「ニヤパドラ」（アドラ流の）霊の諸観念を語ってくれた老人の一人は、イギリス兵の一員としてビルマ戦線で日本軍と戦ったというし、海外経験のあるアドラ人は少なくない。アディオマ Adioma Okoth（1932—2012）のように、現在は隠棲しているような老人でもある時期には留学、あるいは国連の代表として活発に海外に出ていた例もあるのである。

## 参考文献

### 日本語文献

梅屋 潔

- 2008 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—*jwogi, tipo, ayira, lam* の観念を中心として」『人間情報学研究』第13巻：131-59。
- 2009 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—現地語 (Dhopadhola) 資料対訳編」『人間情報学研究』第14巻：31-42。
- 2011 「ある遺品整理の顛末—ウガンダ東部トロロ県 A・C・K・オボス=オフンビの場合」『国立歴史民俗博物館研究報告』169集：209-240。
- 2013a 「アウマ」『岩波世界人名大辞典』岩波書店、15頁。
- 2013b 「アミン・ダダ」『岩波世界人名大辞典』岩波書店、93頁。
- 2014a 「ウガンダ東部アドラ民族における *okewo* の儀礼的特権—現地語 (Dhopadhola) 資料対訳編」『人間情報学研究』第19号：9-28。
- 2014b 「ふたりの調査助手との饗宴 (コンヴィヴィアリティ) —ウガンダ・アドラ民族の世界観を探る」『フィールドに入る (FENICS 百万人のフィールドワーカー シリーズ、第1巻)』(椎野若菜・白石壮一郎編) 古今書院、158-181頁。
- 2015 「葬送儀礼についての語り—ウガンダ東部・アドラ民族におけるオケウォの儀礼的特権」『森羅万象のささやき—民俗宗教研究の諸相』(鈴木正宗編) 風響社、375-396頁。
- 2016a 「ウガンダ元大統領代行、故オボス=オフンビの遺品 (I) —1971年英国外遊時のアルバムを中心として」『人間情報学研究』第21号：117-135。
- 2016b 「ウガンダ東部パドラにおけるトウォ *tuwo* の観念—病いのカテゴリー 88 とその処方」『国際文化学研究』第46号：1-28。

長島 信弘

- 2007 「文化は悪魔—ウガンダ・イテソ民族における新ペンテコステ・カリスマ派キリスト教」『アリーナ』第4号：181-189。

### 欧文文献

Behrend, Heike

- 1999 *Alice Lakwena and the Holy Spirits: War in Northern Uganda 1986-87*. Oxford: James Curry.

Driberg, J. H.

- 1923 *The Lango: A Nilotic Tribe of Uganda*. London: Adelphi Terrace.

- 1936 The Secular Aspect of Ancestor: Worship in Africa. Supplement to *the Journal of the Royal African Society* 35(138): 1-21.
- Hayley, T. T. S.
- 1940 The Power Concept in Lango Religion. *Uganda Journal* 7(3): 98-122.
- 1947 *The Anatomy of Lango Religion and Groups*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kitching, Arthur Leonard
- 1912 *On the Backwaters of the Nile: Studies of Some Child Races of Central Africa*. London: T. Fisher Unwin.
- Kustenbauder, Matthew
- 2009 Believing in the Black Messiah: The Legio Maria Church in an African Christian Landscape. *Nova Religio: The Journal of Alternative and Emergent Religions* 13 (1): 11-40.
- Ocholla-Ayayo, A.B.C.
- 1976 *Traditional Ideology and Ethics among the Southern Luo*. Scandinavian Institute of African Studies. Uppsala.
- Owora, Paul
- 2016 Ugandan Sociologists Met a Japanese Anthropologist: Experience of the Decade. Shiino, W., Shiraiishi, S. & Tom Ondicho (eds.) *Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity*. Tokyo& Nairobi: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies & JSPS Nairobi Research Station. 101-103.
- Oloka-Obbo, Michael
- 2016 Differences of the Methodologies Findings: An Overview. Shiino, W., Shiraiishi, S. & Tom Ondicho (eds.) *Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity*. Tokyo& Nairobi: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies & JSPS Nairobi Research Station. 95-99.
- Republic of Uganda
- 1973 *Speeches by His Excellency The President Idi Amin Dada*. Entebbe: Government Printer.
- Schwartz, Nancy
- 1989 *World Without End: The Meaning and Movements in the History, Narratives,*

and Tongue-Speech of Legio Maria of African Church Mission among Luo of Kenya. Ph. D. dissertation. Princeton University.

2000 Active Dead or Alive: Some Kenyan Views about the Agency of Luo and Luyia Women Pre-and Post-Mortem. *Journal of Religion in Africa* 30 (4): 433-467.

2005 Dreaming in Color: Anti-Essentialism in Legio Maria Dream Narratives. *Journal of Religion in Africa* 35 (2): 159-196.

## 追記

本研究の成立については、笹川科学助成金（13 - 054）に特に感謝する。また、科研費 18720245、24520912、23242055、15K03042、16H05664、16K04126 によっている。記して感謝したい。

（うめや・きよし 社会人類学・アフリカ民族誌）